

最愛の人外下僕たちに嫉妬狂いで犯されて——美しい
鬼と闇堕ち九尾の狐に、双子を孕むまで同時に種付けさ
れ尽くす濃密CP異種婚交尾

第一章

貴族に生まれた女性は下僕を必ず持つことが義務付けられている。

自分の身を守る護衛と身の回りの世話をする執事として、また人間の男が世界から希少とされてしまったので子を成すために。

大体、普通の貴族令嬢なら十歳くらいで下僕を一人持つが、私は自分と相性が良いとされる下僕と契約を結ぶ時に私の魔力量が多すぎて契約する下僕の子が耐え切れず燃えてしまった。幸い彼は一命を取り留めたが私の魔力量の多さに器が耐えられなくなる可能性があるということ。私となかなか相性が良い下僕が見つからず、結局、

私に下僕が与えられることになったのは十八歳を過ぎてからだった。

この時のことで私には炎帝公爵という二つ名がついた。周りからは奇異の目でみられ、世が世なら私は完全に行き遅れだろう。

下僕を持つていない私は周りからは奇異の目でみられ、世が世なら私は完全に行き遅れの変人だろう。

私は屋敷の応接間でソファに座って待っていると、フードを被った男の子と、下僕を連れてくる男性の商人が来た。

フードを深く被っている男の子は商人に背中を押されて私の前へと差し出された。フードを深く被っている男の子を私は見つめていると、私の前に跪き、連れてきた

商人にフードを剥がされた。フードから放たれた彼の容姿は、ショートヘアの漆黒の髪に、燃えるようなあかあかとした赤い瞳に、額から黒曜石のように煌めき漆黒の角が本生えていた。

「綺麗な子」

口から言葉が出てしまっていた。うつとりとため息が出そうなほど。私には、本当に綺麗にみえた。貴族の令嬢達がなぜ異種の下僕を好んで側に侍らせるかという、彼らは圧倒的に人族よりも美しいのだ。

人の男がほとんどいなくなってしまったこの世界では、見目麗しい異種族の男性下僕が好まれる。なぜ彼らが私たち人に従うのかというと、彼らは、昔の種族間戦争で敗北し、従属の魔法をかけることにより私達人間に尽く

しているということが一般的な書物には書いてある。けれど、それは人間が頂点に君臨することになって作られた歴史だ。私は王族と同等の教育をされ隠蔽された歴史を知っている。それに異種族の彼らが私たち人間と戦争して負けたなど到底考えられない。獣人族は私達人間よりも牙も爪も鋭く、身体作りが丈夫にできている。エルフ族は、私達人間よりも聡明で魔法に特化した種族だ。鬼人族は獣人族の様に屈強な身体と牙や爪を持ち、エルフとは違うけれど彼らも魔法の類に長けている。その他にあまり人間の前に姿を現さない幻獣種が存在する。彼らは接触するのも困難なほどどこにいてもわからない。そんな種族だ。そんな種族と種族間戦争をして私達人間が敵うはずがない。結局葬られた歴史なんて単純なもの

だつたりする。昔、他の種族は人間を下に見ていた、それが仇となり騙され他の種族達は従属の魔法を掛けられてしまった。というのが闇に葬られた歴史だ。この歴史が書かれた本は禁書となり今じゃカビ臭いほんの一文しか記載されていない。不都合な真実なのだ。

そんな真実を知っている貴族もほとんどいない。ただ、誰よりも美しい下僕を手に入れ、ドレスを着飾るように下僕の毛並みを気にする令嬢ばかりだ。一時期より良い下僕を手に入れようと下僕の売り買いが加熱した時期があつた、けれど現在の女王陛下がそれを止めるべく、下僕と令嬢の相性を調べてからしか下僕の売り買いをできないように定めた。なので、私達貴族は下僕との相性が一番重視される。私は自分が特異体質故に、今の今まで

下僕を持つていなかった。そして今日私の下僕が初めてくる日だ。

フードをとった彼は鬼人だろう。鬼人はあまり下僕には向かないと言われている。気性が荒く、粗暴で。頭は良いが従順ではないと。けれど私の元に來たのは鬼人の彼だ。私との相性は悪くないらしい。

「名前は？」

私が彼に静かに名を尋ねると、彼は何も言わなかった。不服そうな顔をして私の方を見ようとしなかった。年は私と変わらないと言っていたけれど、私より少し背は高いけれど、まだ第二次性徴の途中なのではないかと思う体格だった。私には少年のように見える。なんだかひ弱そうだなと思う。一応彼は私と同じ十八歳だと聞いて

いたが見た目が幼い。見た目が幼いのはきつと彼が覚醒をしていないためだろう。

「名乗らないなら勝手につけちゃうよ？」

「かまわないし、従属の魔法で思い通りにすれば良い。従わせたいのならそうすればいい」

この子は、下僕になんか足りなかったんだなあと思つてしまった。けれど従属の魔法をかけられてしまつた以上どこにも逃げ場はない。従属の魔法は下僕や奴隸が主人の言うことに従わせるために作られた魔法だ。効力が強く、使い方を間違えれば下僕や奴隸を死に至らしめるほどの効果もある。

「名前を覚えてくれないと不便だから覚えてくれないかしら？」

下僕に下手に出るなど相手をつけ上がらせるだけかもしれないと思うし、主人なのだから強氣に出れば良いと思うけど、下僕になりたくない子に無理強いしても良くない結果になるのは目に見えてわかる。それに私はできれば仲良くしたい。従属の魔法で従わせるのはんく。

「……黒紅（くろべに）」

「黒紅、素敵な名前。ねえ、紅（べに）って呼んでも良い？」

「好きに呼べば良い。俺に決定権はない」

私と黒紅の出会いはこの感じだった。

それから黒紅との毎日が始まった。

黒紅は本来ならかなり地位の高い鬼人なのではないかと思う。黒紅の角は立派で、黒曜石のように漆黑に光る

角を持っている鬼人を私は見たことがなかった。それに黒紅の魔力量は多分私よりも多いような気がする。

「おい、なあ、おい」

現在黒紅が私を呼ぶ時はこんな感じだ。

「お前だよ、お前、さっきから呼んでるのに無視すんなよ」

本来なら私が主人なのだから、きちんと躰けなければいけないのだけれど正直、私に対して黒紅のような態度を取られるのは結構新鮮で私自身が楽しんでしまっている。黒紅の態度はよくはないけれども悪意がないから素直すぎる反応で私はとても新鮮だった。

私達が所属している貴族社会など、悪意と憎悪と、権力に塗れた本当につまらない世界だと私は思っている。

力を持つてしまったが故に歪んでいるのだ。私はこんな考えだからこそはみ出し物だろう。普通は特権階級ということに誇りと特別な感情があるのだろうが、私たちは民に生かされている。そのことを忘れてしまったら傲慢な世間知らずしか生まれてこなくなると思ってしまう。現にそういう貴族も多い。

黒紅が私に向ける悪態や態度は全ての人間に対しての気持ちなので私にとっては清々しいほどに嫌ではなかった。黒紅にとつてはとんでもなく迷惑だろうなと思う。私が黒紅の悪態を楽しんでしまっているから。

「あら、私を呼んでいたの？ 知らなかったわ。私のことはお嬢様、若しくはご主人様と呼ばないと私のことだとは思わなかったわ、ごめんなさいね」

嫌味つたらしく、けれどからかい半分に黒紅にいうと黒紅はカッと顔を真つ赤にしたかと思うと今度は一瞬手を振り上げたけれどそれを自分で諫めて、私をキツと睨んだ。黒紅は、言動こそ乱暴だけれど根はとても優しいのではないかと思う。怒りに任せて私を叩いたつて私は黒紅を叱責したりはしない。私は一度も黒紅に従属魔法を使つたことはない。黒紅もそれをわかつているのだらう。

若しくは、彼は処分されることを恐れているのかもしれない。貴族には彼らをアクセサリーのように取替へ引替へする令嬢も多い。彼らはものではない。人間ではないけれど人間と同じように意思の疎通ができるのだから簡単に捨てられたりする時の気持ちなど考えたこと

がないのだろう。私は黒紅以外と今の所契約を結べないので取っ替え引っ替えという発想はない。どんなに問題児だろうが、どんなに嫌がられようが私には黒紅しかないのだ。黒紅の態度を見ていると黒紅が私のところに来るまで黒紅がどんな扱いを受けてきたのか私にはわからない。けれどあまり良い扱いじゃなかったのがわかる。黒紅の目が人を恐れているのがわかるから。

「おい、なあ、おいってば」

「さつきも言つたでしょ？」

「俺は、俺が認めた人しか主人とは呼ばない。お前が俺の主人になりたいなら俺を認めさせてみろ」

偉そうな態度の黒紅だけれどやつぱり瞳には怯えている色が見える。人間を信じていないのだ。黒紅はそれを

隠しているけれど。

く中略く

「だめだあ。今の俺じゃ、お嬢様を本当の意味で守れない。お嬢様と一緒に、お嬢様を守れる強さが欲しい」

私は黒紅の唇に口づけをする。軽く触れるだけの口づけをして、

「完璧になんてならなくていいわ。それにすぐに全部できるようにならなくても。でも今日の黒紅は私の最高のパートナーだったわ」

「でも、俺はお嬢様を守りたい。全てにおいて。だってお嬢様は俺の全てだから」

私はもう一度黒紅をぎゅつと抱きしめた。どうやら私は今日一番興奮しているらしい。確かにボロボロにされていたけれど、私には一番黒紅がかつこよく見えた。

「紅、私、黒紅と契りたい」

「お嬢様、それは……」

「私は覚悟出来てる。紅は？」

「上手くできるかわかんないけど、お嬢様が一緒なら……」

……

屋敷に帰り、黒紅は食べ物等で汚れた身体を清め、私も身体を清め、部屋に戻ると黒紅がベッドに座っていた。黒紅の横に座る。ドキドキと心臓の音がうるさい。

黒紅がゆつくりと手を伸ばしてきて、頬に手が当たる。黒紅の手が震えてるのがわかった。

そのまま唇が寄せられてちゅつと音がした。緊張しているのが伝わってくる。何度も何度も口づけされるたびに黒紅の手の震えが収まっていくのがわかった。

「お嬢様、緊張してる？」

思わず笑ってしまったら黒紅がおろおろしていた。

「紅だつて緊張してたでしょ？」

黒紅はみるみるうちに顔が赤くなつていった。顔を覆つて

「はっ、恥ずかしい。カッコつけようと思つてたのに」

私はやつぱりくすくす笑つてしまった。

「紅はそのままがいいよ？」

「なんか、ガキ扱いしてない？」

「そんなことはない。ほら」

私は自分の左胸に黒紅の手を当てる。どくどくという心臓の音と黒紅の手が柔らかく揉んできた。

「やつぱり、ガキ扱いしてるだろ？俺だって男だぞ？」

「紅じゃなきゃ、触らせない」

左胸の黒紅の手を上から包み込む。

「はあ、お嬢様には敵わないなあ」

私はふふつと笑った。そのまま胸をもみもみと揉まれ、口づけをされる。私の薄く開いた口のにゆるりと舌が入ってきた。初めて舌を絡められたキスをされた時よりなんだか上手い気がして、唇が離れた瞬間に

「紅っ、なんか上手じゃない？」

「本当！？嬉しい。宝玉さまと勉強したんだ」

「えっ？ それって」

「書物を読んで、知識を深めたんだ。宝玉様はあととは実戦で磨けってさ」

私は複雑な気持ちになっっていると

「俺はお嬢様以外とする気はない。お嬢様の下僕だからとか従属の魔法とか関係ない。俺の全身全霊を懸けてあなたに尽くすと決めた。これは嘘偽りのない俺の気持ちだ」

燃えるような真つ赤な瞳に射抜かれて私は黒紅に抱きついた。

「ありがとう、紅。私のところに来てくれて」

紅は静かに私を見つめて、ゆっくりと口付けてくれた。離れた唇に

「世界で一番愛おしい私の美しい鬼」

そう告げると首にちゅっ♡ちゅっ♡と口づけられちゅっ♡とベッドに寝かされた。紅はそのまま服に手をかけそのまま喉元、鎖骨もちゅ♡ちゅっ♡と音を出されて吸い付かれた。

「お嬢様はいつも、俺を美しいっていうけど、俺はお嬢様のが綺麗だよ」

黒紅にそう言われて顔が赤くなる。

「そういうところは可愛いし」

「あんまりからかわないで」

「本心だよ」

耳元で囁かれて身体がぞくぞくとした。

黒紅の手が私の身体を這っていく黒紅に身体を触られ

たところが熱を帯びていく。ただ触れられたただけなのに。乳首に触れられて、左の乳首は円を描くようにくるくると触られ、右の乳首はペロつと舐められたかと思うと今度はじゅるじゅると音を立てて吸われた。

「あっ♡♡♡♡♡やあ♡♡♡♡♡だめっ♡♡♡吸っちゃ♡♡♡」

気持ちよくて、気がついたら身体がびくびくつと跳ね、腰も動いていた。その間にするすると手が滑っていてそこがまた熱を帯びていて、下着の上に手が置かれ、指でクリトリスを探られカリカリと引つかかれる。

「んっ♡♡♡カリカリだめっ♡♡♡」

「ん？ 本当にだめ？」

黒紅と瞳が合い聞かれる。真っ直ぐに射抜かれて

「だめっじゃない♡♡♡」

「気持ちよさそう」

「お願い♡♡♡紅♡♡♡直接触って？♡♡♡」

く中略く

第二部

「私は彼と仮契約したいと思います」

「まあ、お嬢様ならそういうと思うてたよ」

私はふふつと笑って、ごめんねと黒紅にいうと黒紅は

私の手をしっかりと握って。

「お嬢様の一番は俺だからな、忘れんなよ」

と小声で話できた。私はその言葉で耳が熱くなっていた。

その後、宝玉に連れられて銀狐のところへ案内された。王宮の地下深くにある監獄だ。衛生的であるとは言いがたく暗くじめじめとしている。銀狐の子は暴れたり、破壊の発動を抑制するためにかなり嚴重な扉で覆われている。独房に閉じ込められていた。

私は彼と従属の契約をする。本人との意思確認をしたかったのだけど、危険が伴うため先に契約しなければならぬ規則らしい。宝玉が私にナイフを手渡し、彼の胸元をはだけさせる。前回結んでいた従属紋が火傷のよう

に爛れていた。その上にもう一度従属の紋を描き直し、私はその紋の上に血を垂らす。

「ぐうッ……」

皮膚が焼けるような音と匂いにたまらず銀狐の子が呻き声を上げる。そのまま紋が光輝き私と彼の契約が終わる。本来ならこれで本契約になるが、彼は一度違う主人と契約を結んでる上に私が無理やり上書きにしたにすぎないので仮契約となる。

私と契約を終えると銀狐だった彼は、半人前の姿になった。仮契約を結び直したことによる後遺症のようなものだ。自慢であつたであろう銀色の髪は真っ黒になり、おかつぱの様な髪型になっていた。彼は銀色のたなびく

髪を気に入っていたのだろう。綺麗に整えられていた尻尾と耳も真っ黒になつてしまつていた。寵愛を受けられなくなつてしまった身体も小さくなつてしまつた彼。私が彼の前で彼を見下ろしていると彼はポツリと

「美しくない……私は価値がない」

美しさに絶対的な自信があつたのだろう。貴族令嬢が連れている下僕はほとんどが自分が一番だと思つてゐるだろう。

「名前は？」

「白銀（しろがね）です、ご主人様……」

従属の魔法のため白銀は素直に私の問いに答える。彼を連れて屋敷に帰る、馬車に黒紅と白銀の三人で。黒紅はとても不服そうだけれど、白銀は抵抗もしないし、暴

れもしなかった。ただ身を流れに任せてる様だった。なんだか捨てられたんだという雰囲気を纏っていた。

く中略く

「私は、黒紅に嫉妬しています。ご主人様の寵愛を独り占めしていることにずっと。私もご主人様の寵愛を頂きたい。黒紅と同じ様に信頼と寵愛を私もご主人様に捧げます」

白銀の瞳が薄暗い部屋の中でも光を拾ってきらきらと輝いていた。

「愛しています。ご主人様」

「本当に良いんだね。もしかしたら元の主人のところに

は帰れないかもしれんよ？」

「かまいません。黒紅と契りをしていた時も心中穏やかではありませんでした」

白銀は私の顎を掴んで自分の方を向かせ、キスしてきた。何度も音を立ててキスされ、上唇を甘く食まれる。何度か繰り返すうちに舌を入れられて絡め取られる。

「んっ♡♡♡はあ♡♡♡ちゅっ♡♡♡」

唇が離れると白銀に見つめられ

「ご主人様、黒紅とどの様な契りをされていましたか？」

白銀の問いに私はしどろもどろになる。

そもそも黒紅以外とはしたことがないのだ、どんなと言われても。普通としか答えられない。

黒紅としかしたことないからそれが普通だと思ってるから

「ご主人様のお望みを叶えてあげられますよ？」

電子書籍限定書き下ろしチラ見せ

「んっ……あっ……やつ……」

静かな執務室に私がペンを走らせる音だけがこだましていた。珍しく黒紅にお使いを頼んでるのでいない。白銀も屋敷内の点検をしているので一人だ。なんだか久しぶりの一人の時間だなと思いつつながらペンを走らせていたのだけれど……。連日連夜、ほぼ毎日の様に黒紅か白銀に愛させる日々を送っているのに……。私は股が疼くのを感じる。一人の静かな時間だからこそ仕事を頑張つていたのだけれど。どうしても我慢できなくなつて私はドレスのスカートを捲り上げて下着の中に手を入れて、クリトリスを触る。毎晩、黒紅が指を這わせて弄る姿を思い浮かべて。えっちの時はちよつと意地悪なんだよなあ黒紅なんて思つて快樂に夢中になつて貪つていると

「何してんの？お嬢様？」

（サンプルはここまで続きは本編でお楽しみ下さい）

奥付け

作品名: 最愛の人外下僕たちに嫉妬狂いで犯されて——美しい鬼と闇堕ち九尾の狐に、双子を孕むまで同時に種付けされ尽くす濃密3P異種婚交尾

著者名: つばある。

イラスト: 湯朝はいね

発行日: 2026年8月1日 (第一刷)

連絡先: <https://www.pixiv.net/users/23830593>

禁止事項: 「無断転載・AI学習禁止」